

---

# クロノセカイ

夢月みぞれ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

クロノセカイ

### 【NZコード】

N6020L

### 【作者名】

夢月みぞれ

### 【あらすじ】

平均的な一般家庭にて育つてきた北村沙織と、その弟の健史。

二人は水族館へと向かうためにバスに乗り込んだが、不幸にも事故に巻き込まれてしまう。

幸福な人生を歩んできた二人は、それぞれ大切なモノを失うことになつた。

不幸はどこにでも転がっていて、簡単に人間を食い物にする。

これは、そう。それが無知な姉弟に転がつてきただけの話。

。

田舎と言つても差し支えのないであるつゝい歌代市は、人口八万  
人の、都会から見ればとても小さな街だ。

地下鉄はなく、けれど公共交通機関はこれと言つて文句の無いく  
らいには発展している。

どこかの街のように自動車が盛んであるとか、料亭が立ち並んで  
いるなんてことは一切無い。

これと言つて特徴がないのが、この街の特徴だった。  
それを象徴するかのような生き方を北村沙織きたむらさおりは送つていた。

見た目は「ぐぐぐ」普通で、悪くもなければ良くもない。

十九歳の女らしく育つてはいるが、胸などの出て欲しい部分はそ  
こまで大きくなり、出て欲しくない部分に関しても、これまた適度  
に出ていない。

髪は染めることもせず、一応周りに一番多いだろうと踏んだセミ  
ロングで揃えている。

学はと言われば地元の短大に通つていたが、それも残りわずか  
だ。

一応就職は狙いの企業から内定を貰つている。

このままいけば、四月からは社会人として世に出ていく。

見た目も内面も人生も、これと言つて特筆すべき点は、無い。

北村沙織はこのまま平凡に、何の幸とも不幸とも無縁のまま、静  
かに息を引き取つていく。

そう、思つていたのに。

「たす、け……」

ガソリンが焼ける臭いと、むせ返るような血の臭いと、燻ぶり荒れる黒煙。

周りにそれらが蔓延する中、沙織は身動きできないまま呻き声を上げていた。

しかしそれは自身が助かりたいが為のモノではなく。

唯一血を分けた姉弟である、自分より幼い弟の命を乞うての声明だった。

血の涙を両の眼から流しながらもなお叫び続ける。

「お願い、たすけて 」

弟を助けようと声を枯らすも、彼女にも限界が訪れた。極限にまで追い込まれていた意識が断絶しはじめたのだ。

ちか、ちかと脳の中で何かが切れかかる。

何としても弟を助けねばならぬのに、無力な自分は何も出来ないまま、こうして闇に落ちてしまつ。

その歯痒さを脳裏に焼き付けたまま、北村沙織は深く昏い世界へと誘われた。

まるで滝のように流れる紅い雲にも、最後まで気がつかないまま。

クロノセカイ

気がつくとそこには、見慣れない世界が広がっていた。  
前を見ても、横を見ても、起き上がってみても、どこを見ても真

つ暗だ。

何が起きているのか 黒髪の女は戦々恐々としながら、そつと自分の田に手を触れてみた。

「 」

何かが巻かれている。

手触りからして、これは包帯ではないだらうか。

そこまで思案した彼女の耳に、聞き覚えのない声が聞こえてきた。

「北村さん…？」

誰かは知らないが、なぜそこまで驚くのか。

疑問はしかし、その女声の続きを聞いたことで頭から吹き飛んだ。

「先生、北村さんが田を覚ましたー！」

「本当か」

先生、と言つ單語にて瞬思考が凍結する。

そう言えど、先ほどからここには何かしらの刺激臭がしてこる。嗅ぎ慣れているような、そういうような。

これは、確か。

北村沙織が匂いの正体に気がついた時には、何者かに手首を掴まっていた。

「……よし、脈は安定しているな。おに君、足立先生を呼んできてくれ

「はい」

慌ただしく駆けていく一つの足音。

叫びだしたい一心を抑えながら、沙織は注意深く周りの状況を把握しようと努める。

今となつては、聽覚と嗅覚、それに触覚だけが世界の情報を得る手段だ。

それらをフルに活用し、一つの結論を導き出した。

「消毒の匂い……先生……ここは 病院？」

獨白はしかし、先生と呼ばれていた者にも伝わっていた。

「そう、ここは病院だ。君は、もう一週間も田を覚まさなかつたんだよ」

「一週間……」

ゆつくりと、外から入つてくる情報を脳内で咀嚼する。

現在、どうやら自分は病院にいるらしい。

しかも一週間も意識を失つていたのだとか。にわかには信じがたいが、眠つている時に外の世界を知る術はない。

問題は……なぜ、自分がここにいるか、だ。記憶をさかのぼつてみる。

私は確か。

「わたし……わたしは……」

早まる鼓動を落ち着かせながら、妙に痛むこめかみを押さえながら、北村沙織は記憶の糸を辿つていく。

そして、一つの閃きが、頭の中で弾けた。

「そう、そうだ。健史　　」

健史　　北村健史は、沙織にとつて掛け替えの無い、たつた一人の弟だ。  
その存在を思い出した瞬間、あの日の記憶がフラッシュバックした。

「あ　　ああ」

溢れ出す地獄絵図。

今は外の景色さえまともに見えていないが、あの時の風景が脳内でまたまた蘇つてくる。

何かがぶつかる音。

轟音の後に続いた悲鳴の嵐。

焦げ臭さと血の臭いが入り混じった、体感したことのない恐怖。

そうだ　　あの日は確か、弟にねだられて水族館に行く途中だつた。

バスに乗り、電車に乗つて目的地を目指していた。

沙織よりも五つ年下の健史は、年頃の男の子と言つた感じではしゃいでいたのを思い出す。

まだ十を越えたばかりの少年は、大好きなイルカに会えると、前日からずっと目を輝かしていた姿が目に焼き付いている。  
だのに、バスに乗り込んで十分が経とうとしていた頃、悲劇が起きたのだ。

はつきりとは思いだせないが、確かに物凄い衝撃と音が全身を襲つたあと、車体が大きく転覆していた。  
ここくらいから視界がゼロになつた気がする。

そこからは、ただひたすらに弟の心配をし続けていた

こ

れが、いま彼女に思い出せる全てだ。

その後どうなったかは微塵も知り得ない。

これだけの事を思い出して、沙織の重かつた口がよつやく動き始めた。

「あの、すみません。私の弟を知りませんか?」

「弟……？　あ、ああ。私は君の担当医じゃないからわからない。  
詳しいことは担当医の足立先生に聞いてみてくれ」

「あ、はい」

前髪を風が撫でる。

それは誰かが移動した際に起きた、小さな横風だった。

自分が何かまずいことを聞いてしまったのか、それとも用事があつたのかは定かでないが、すぐ傍にいたであろう先生が立ち去つたようだ。

それも何故か急ぎ足で。

目の見えなくなつた沙織は、早速周囲にアンテナを巡らし、推測を立てながら状況を想像していた。

弟も心配だが、今は自分の体でさえどうなつているかわからない。そんな焦りから、彼女は出来ることはなんでもやつてこようとした意志を固めた。

自分が弟を守るんだと息巻いて。

しかしあれだけ大きな事故だったのだ。

最悪歩けなくなつてているかもしね、などと考えつつ、誰もいなくなつた病室で、沙織は一人担当医を待つのだった。

「大丈夫だよ、君の弟さんは」

「そうですか……」

この台詞を聞いて、どれだけ心が救われたことだろう。

あれからやつてきた医者は温厚な性格の持ち主のようで、喋り方はゆっくりと丁寧であり、沙織はすぐにこの足立と言う先生は、五十前後の人の中さうな白髪頭のオジサン、と想像した。

まさか痩せ細った、黒縁メガネをかけているような先生ではあるまい。

大きく温かな掌がそれを証明している。

そう思い込んで、沙織は安堵の息を漏らした。

「良かつたあ……本当に」

「……そう、ですね」

「お伺いしたいんですけど、いいですか？」

「ん？　あ、ああ。なんでも聞いてください」

「それじゃあお言葉に甘えて。……どうして私は運ばれてきたんですか？」

足立と名乗った医者の、息を飲む音が聞こえてきた。

まさか記憶喪失ではあるまいな、と言う医者の心理が起こさせた行為だったが、まさかそんな考えをされているとは露にも思つていい沙織は、小さく首をかしげる。

「どうかしました？」

「い、いや。……ええと、君はだね、交差点内で事故に逢つたんだ。居眠り運転だつたトラックが、君たちの乗つていたバスに横腹から突つ込んでね。

バスは大破。大勢の乗客が怪我を負つたんだ。その内の一人が、

北村沙織さん

貴方です」

いま聞き及んだ話は、大体沙織の思い出した通りの筋書きだった。しかしあの強烈な衝撃が、トラックの追突だったとは夢想だにしなかつたが。

「負傷者はどれくらいですか？」

「二十……名ですね。しかしどうしてそんなことを？」

「いえ、興味本位からです。今までこんなこと、一度として無かつたので」

そう、とりわけ沙織は“入院”も“事故”も初めてのこと。自分がまさかこんな大事件に巻き込まれるなど、思つてもみなかつた。

いつもニュースで見ていることがこうして現実に起きていくのだと、やつと実感することが出来たのが少しばかり嬉しいような気もする。

事故は確かに怖かつたし、こうして怪我までしてしまつたが、これはこれで良い経験になった。そう思い込むことで、一刻も早くこの惨劇の記憶を消し去ろうとしているのも事実ではあるのだが。

「それより、どうして私の田には包帯が？」

いよいよ本題に切り込むことにした沙織。

事故の話は本当らしく、それに巻き込まれて自分も怪我を負つたのだとは理解できる。

しかし自身の状態は一切不明だ。

ベッドから降りる気力もなければ、両手を覆つ正在の包帯を自分でとる勇気もない。

もしかしたら辛い現実から逃げたいがために、こうして自分から

調べようとしているのではないだらうか。

答えは YESだ。

北村沙織は、心底自分自身に自信が持てない。今まで平平凡凡に暮らしてきた彼女にとつて、今回の出来事はあまりにも強烈すぎた。

感覚としては両足もくつついでいるし、両腕だって健在のはず。だがもし違つたらどうしたらいいのか。

そう考えると怖くてたまらない。

だからこそ、こうして人に尋ねる。

こうすれば、最悪、足がないだの腕がないだの言われても受け入れることが出来る。

他人が諭してくれれば、それなりに応じれるはずだ。

それは、恐怖を味わつた者にしか見出せない、ある意味最善の逃げ道なのだ。

責任転嫁と言えば聞こえは悪いが、とにかく、自分で崖を落ちるより、他人と一緒にならまだ少しあ安心出来る。

困窮した様子を医師も悟つたのか、足立担当医はゆっくりとその腰を上げると、その持前の優しい声で、

「北村さん、貴方はさつき目覚めたばかりで色々と負担が大きいでしょう。病状に関するお話を、また明日にしましょう

ではお大事に、と一声かけて部屋を出ていく医者。ぱたん、とドアの閉まる音が聞こえると、なるほど、疲れがどつと押し寄せてきた。

自分では普段通りにしているつもりでも、相当気を張り詰めていたようだ。

小さくため息をつき、そのままベッドに身を預ける。

相変わらずの闇を目前に感じながら、北村沙織は頭から布団を被つた。

「どうまでも広がる深淵から逃げるかのよつ」。

夜の病院ほど不気味なモノは無い。

とりわけ入院経験のない沙織にとつて今夜は、目が見えないことも手伝って心胆凍えたらしめる夜となっていた。

視覚を失っている現状、聴覚だけにしか頼れないのは仕方のないこととはいえ、それが恐怖心を一倍にも三倍にも増幅をせているのは間違いようのない事実だ。

ちよつとした風音に怯え、ビードルともなくやつてきては去つていく足音に身を震わせる。

静まり返った院内と、一時間ほど前に消灯時間を告げにやつてきたナースのセリフから、今が深夜だと推測できた。

これほどにまで病院が怖いものだとは

沙織は遠き日の会話

を脳裏に浮かべた。

『病院つて怖いトコロよ

それは、健康そのものの体を嘆いていた、幼き日の会話だ。

どうしても小学校の年間行事であるマラソン大会が嫌で、体が弱いことを理由によく病院に通っていた女友達に、沙織は羨ましいと言葉を発した。

そして帰ってきたセリフがコレだった。

病院は怖いトコロ。

注射も怖いけど、それ以上に怖いわ、と言っていたのを思い出す。

当時の自分は、マラソン大会をはじめ激しい運動も、楽しくない

水泳も、きついだけの体力測定もやらないでいいのだから、と羨望の眼差しでその友達を見ていた。

病氣にもならず、大きな怪我もしなかつた沙織は、病院との縁が全くと言つていいくほどになく、そんな彼女だからこそ病院に米粒ほどの畏れも抱かない。

今鑑みてみれば申し訳なさが込み上げてくる。

いくら畏れを知らないとは言え、相手の気持ちを少しでも酌むべきだった。

この怖い思いはきっと、あの時の罰なんだ、と北村沙織は身を縮こめた。

「…………

布団を頭から被さり、世界から精神を離脱しようとするも、音だけが異常に耳に付く。

眠気はやつてきてくれるどいか、逆手に取つたよつて無駄に神経が研ぎ澄まされていく。

これでは眠れない。

しかし、だつたらどうすればいいと言つのか。

枕元に伸びてきているナースコールのスイッチを押せと？

それとも、暗闇の中を、なんの助けもなく歩みながら夜風にでも当たつてここと？

……否、いま彼女に出来ることと言えば、こうして身を丸めながらひたすら夜中を耐えきる」と。

その一点のみだ。

「…………

はあ

布団の中で深呼吸をする。

きつと自分は疲れすぎて眠れないだけ。

体はちやんと疲れているんだから、扉を開じていればそのままひざ  
れるはずだ。  
やう信じ、今度こそ眠りについた、その時。

「お姉ちゃん」

ふと、聞き慣れ親しんだ声が、耳の中に入ってきた。  
心音が一気に跳ね上がる。

まさか

そんな。

「おおりお姉ちゃん」

聞き間違いかと思った。

いや、そう思おうとした。

だが繰り返されたセリフは、間違えようもないほどに彼女の胸の  
中に残つていてるモノだった。

これは、忘れもしない、大事な弟の声ではないか

。

「健史……？」

布団を剥いで体を起こす。

静かすぎるセカイの音が、耳に痛みをもたらしていく。

しかし今の彼女には、そんなことを気にする余裕すらない。  
全神経を来客へと向ける。

「健史なの？」

静かに、われどはつきりとした口調で問い合わせる。  
声は、それに応じた。

「うん」

幼げな声だけが耳に届く。

姿が見られないのが残念だが、沙織は安堵と喜びで、そんな些事は「の次だと言わんばかりに喋りはじめた。

「無事だったのね。怪我はしなかった?」

「うん」

「ああ……良かった。本当に良かった……」

思わず涙ぐんでしまった。

今は闇しか見えない両目だが、この包帯の向こう側に佇むである。我が弟はきっと、大した怪我もなく笑顔をこじらに向けているのだろう。

そう思つだけで胸がいっぱいになつた。

「『メンね。お姉ちゃん、ちょっと怪我しちゃつたみたい。だから退院できるまで少し時間かかっちゃうけど……。お姉ちゃんが傍にいなくても、ちゃんとお利口さんにしておくのよ?』

「うん」

「わかればよし。 さ、むひと近くで近くで」

両手を広げて招き寄せようとする。

だがいくら待っても、その手には何の感触も得られなかつた。

不可思議に思つた沙織は、口感の弦を洩らす。

「健史……?」

そんな姉に向かつて弟が放つた言葉は、あまりにも理解を離れたモノだつた。

「「じめんなさい、おおつお姉ちゃん」

悲しそうな声で、そう謝罪する可愛い弟。  
もちろん沙織は困惑した。

目が見えないことが焦る気持ちを煽っている。

「じ、じいしたの」

「「じめんなさい……」」

尋ねても返つてくる言葉は同じ。

“「じめんなさい」”

一体、健史は何を謝つているのだらうか。

核心を得るじじりか表情さえ見えぬ沙織には、相手の胸中を推し量ることさえ出来ない。

そんな状況でまともな推測など出来るはずもなく、ただ目前にいるはずの健史が発するであろう次の言葉を待つしかなかつた。

やうして、何時分が経つただうか。

「健史……？」

ふと、人の気配が無くなつたのを感じて、沙織が闇に向けて言葉を投げる。

しかし静謐の中での返事が返つてくる雰囲気は無く、ただ息苦しく重々しい空気が漂つてゐるだけだつた。

足音も無ければ、扉を開けた音も無かつた。

もしかしたらまだ自分の周りのどこかにいるかもしれない。

そんな淡い期待を持つてはみたものの、それが単なる気休めなの  
だとは、誰よりも彼女が理解していた。  
それでも名前を呼んでみる。

「健史」

風の音さえ聞こえない、真っ暗闇の中。

虚空を彷徨う沙織の手だけが、唯一部屋の空氣を乱している。

「ん……」

氣だるい体に、混沌としている思考。

無臭の夜とは違った、香ばしい香りのする朝。

だが黒一色に支配されている沙織の視界では、昼夜を判別するこ  
とは不可能に近い。

そんな彼女が朝だと判断したのは、たつたいま嗅いだ朝の香りと、  
周囲の喧噪、それに頬に当たる暖かい何かを感じてのことだった。

ぐらつく頭を右手で支えながら体を起こす。

布団を頭からかぶつて睡眠に入ったはずなのだが、朝の日光を肌  
で感じることが出来たと言うことは即ち、頭が布団から出ていたこ  
とになる。

……あれからなかなか寝付けなかつたせいだらう。  
痛む頭の中を落ち着かせるように、浅くため息をついた。

「健史……」

昨日のアレは一体なんだつたのだろうか。

わざわざ自分の所を訪ねておきながら、『めんなさい』と謝るばかりで会話にすらならなかつた、弟の存在。

あれだけの大事故を経たのにも関わらず無事に再開できたというのに、どうして喜びではなく謝罪の言葉を口にしたのか。

考へても答えが見えてこない。

まるで出口の見えてこない迷宮の中に足を踏み入れたようで、北村沙織は起床から一度田のため息をついた。

今度のため息は、深く長い。

頭痛が、ひとしお彼女を苦しめた。

「それじゃあ北村さん、貴方の現在の症状を説明します」

「お願ひします」

運ばれてきた朝食を看護師さんに食べさせてもらひと『ひ、恥ずかしいにも程がある状況から一時間が経とひとしていた頃。』脳の気配が迫つてくる最中、昨日沙織の担当医だと書つていた先生がやつてきた。

相変わらずゆつくりかつ丁寧な喋り方で話を進めていく足立先生。妙に安心感があるのは、この口調のせいなのか声のせいなのか。とにかくその安心感のおかげで沙織は緊張することもなく話を聞く耳を持つことが出来た。

「まずはおひいですが。北村さん、貴方は約一週間前、バスに乗つていて事故にあつた。いまでは良いですね?」

「はい」

「事故にあつた時、自分自身で怪我などは確認されましたか？」  
「いいえ。でも田は事故にあつた直後くらいから見えてないです」  
「そうですか。では、まずその田について説明しましょう。

症状から言えば、貴方が視力を失つたのは、事故時に両田を強く打つたのが原因だと思われます。外部からの強力な衝撃により眼球が圧迫され、内出血と筋断裂、それに神経もズダズダです。これを治そうとするのは極めて難しく……現代医学では治しきれないとしかお答えできません」

「…………」

そんな、予感はしていた。

あれだけの大きな事故だつたのだ。

命があつただけでも僥倖だと思つのが筋と言つモノではないか。

「力不足を痛感します。すみません……」

「いいえ。それで？ 他の部分はどうなんですか？」

まさかこれ以上絶望はあるまいと沙織は希いながら、続きを促す。

「視力以外にダメージが大きかつたのは、左足です。事故現場で意識を失つたのも、ここからの多量出血が原因とみられます」

「多量 出血？」

「はい。これも申し上げにくいのですが……、トラックと衝突してバスが転倒した際、ガラスが脚に刺さつていていまして。

血管の方は手術で問題なく治療出来たのですが、深く傷ついた神経までは……」

「…………」

これ以上は言つに耐えないとばかりに言葉を切る担当医。対する沙織は、脳内でリフレインする今の説明を、理解できない

とばかりに首を横に振る。

それは理解できないのではなく、理解したくないが為の現実逃避であったが、そうなるのも無理はなかつた。

「うら若き乙女ともすれば、人生は今から花開いていくものだ。どうしてこんなところで躊けるものか その、あまりの不条理に、沙織は戦慄いた。

これから一生、目が見えない。

これから一生、左足も動かない。

こんなにも傷ついた自分を、どうしてまともな殿方が迎えてくれようか。

恋もまだ、もちろんキスもまだだ。

愛しい夫の顔も、いつかこの両手に抱くはずだった我が子の顔も見ることは叶わない。

運命はそれでも飽き足らず、どうして足の自由まで奪つてしまつたのか。

目が見えず、片足が動かないといつひとまつまい、車椅子の生活を それも、外に出るには自分の代わりに目となつてくれるお付きまでもが必要になるということ。

そんな不自由極まりない生活を、これから死ぬまで続けていかなければならぬとは。

これが慟哭せずにいられようか。

まだ両足の自由が無くなる方がマシだつた、まだ目だけが見えなくなるだけの方が良かつた、まだ目覚めなかつた方が良かつた

！

だが彼女は泣き叫ぶ一歩手前で堪え、掠れた声を以て、眼前にいるであるうつ白衣の男性に向かつて問い合わせした。

「わた、わたしの話はもういい。

それより、た、健史は？」

つれたえる姿はやはり痛々しい。

足立医師も、そんな彼女の状態を目前にして、事実を事実通りに話すことが正しいことなのかわからなくなっていた。

明らかに今の沙織は取り乱している。

ここで真実を述べたとしたら、間違いなく卒倒することだらう。

医師として、というよりも、人間としてそれは躊躇われた。

「健史君は……今はまだ、安静にしています」

咄嗟に出た嘘も、それが嘘だとバレなければ真実となる。實際、足立のセリフを聞いた沙織は、深い安堵の吐息とともに頭を垂れた。

患者をだますのは心苦しかったが、それで生きる氣力を持ち直してくれるのならまだいいんだ嘘でも吐くべきだ。

それは、二十年近く医者をやつしてきた足立の、経験をもとに導いた見解だった。

「良かつた……」

「……………」沙織が長話が過ぎましたね。今日はもうお疲れでしょう。ソリヤでやめておきましょうか

逃げるように立ち去る。足立。

その間に、沙織が声をかける。

「先生。健史にはじつ余えますか?」

「さう、と良心が痛んだ。

足立はその痛みから逃れようと、急いで部屋から出ようとしたが、どうしても足が動かない。

まるで両足が床に吸いついているかのよう。

逃げられない そう観念して、足立は回答に悩んだ。

このままこの部屋から逃げ出すことが出来れば、どれだけ気が楽になることか。

しかし生糀の医者である足立は、このままと云ひついで患者から田を背けることができなくなってしまった。

だからと云うわけではないが、爆発寸前の心臓を整え、思考をまとめて回答を探る。

いま彼女が期待している答えは、果たしてなんなのか。時間にして二十秒も経たない時間の中で、足立は一つの答えを口にした。

「……ここって云う治療室から出たら、かな」

ここと云うのは集中治療室のことで、大抵は家族にしか入室が認められていない。

家族とて、ひとたび患者の容体が悪化すれば外へと弾き出されてしまう。

足立が思いついた言い訳は、まさこのひしを用いてのモノだつた。

集中治療室なら、万が一沙織が訪ねてきても追い返す口実がいくらでも作れる。

看護師連中に相槌を頼んでおけば問題はないだろう。もはや子供の言い訳ともとれる苦しい弁明だったが、聞き手はどうやら納得したようだつた。

「どれくらいかかりそうですか？」

「さあ……それこそ神のみぞ知る、ってやつですからね」

この時、足立は心から沙織の田が見えないことに感謝した。

今の自分の顔は、間違いく引きつった笑みを張り付けている

とだらう。

もし沙織の目が見えていたとしたら、いつ嘘が露見してもおかしくない状況だ。

今度こそ背徳心が足立医師の心の深部まで蝕み、堪えのきかくなつた精神が動かなくなつたはずの両の足を稼働させる。

「それでは、また」

振り向くこともなく、足立はよつやかに動き出した自分の足に運ばれるように部屋を後にした。

輝かしい夕焼けを前に、北村沙織は立ち尽くしていた。

壁伝いにやつてきた病院の屋上には、都合の良いことに猫一匹さえもいなかつた。

途中、何度も腕や足を打つけたせいで、あちこちに鈍痛が走っている。

それでも本人は痛がる様子もなく、手すりに手を置いたまま、ただ茫然と立ち尽くしていた。

風が穏やかに流動しているのが肌で感じられる。

街は活気に溢れているようで、やわめきがこじまで伝わってきていく。

世界は今日もこんなにも普通で、こんなにも普遍的だ。

それなのに、どうして私は今、こんなにも絶望的なのだろうか。

どうして屋上にやつてきてしまったのかさえわからない。

ただ、医師の話を聞いてからと呼つもの、心がざわめいていて落ち着かなかつた。

そして気がつけばココにいた。

感覚の無い左足が、やけに腹ただしく感じる。

沙織は今、怒りとも、悲しみとも、諦めともとれる、自分でもよくわからない感情に翻弄されてい。

昨日、両親がやつてきた。

もちろん沙織に対し、精一杯の気遣いと優しさを持つてくれた。

母親は涙まで流し、生きていて良かつたと言つた。

しかし沙織が感じたのは、びつよつもないほどの中虚無感で、決して喜ばしいモノではない。

まさか両親の田の前でそんなことは口にしていいが、心の中では両親たちが帰るまでずっとそう思い続けていた。

そして今日、気がつけばここまで来ていた。

無意識下にあつたとは言え、ここに来たのは間違いだ。

医者や看護師たちの言ひ通り、沙織は重病人であり、安静にしていなくてはならない。

にも関わらず、ここへやつてきてしまつた理由は明らかではない。明らかではないが 不穏ともとれる、一つの予感がある。

「…………」

フーンスから身を乗り出して下を向くと、一瞬、吸いこまれそうになつた。

「ひ、と風のうねる音を聞いた瞬間、身体が軽くなつた。まるで奈落の底から、新しい死人を歓迎する魂たちが、そちら側に引きずり込もうとしていたかのよつ」。

「は、つ　　」

“死”という概念を体中で感じた沙織は戦慄した。

とつさにフェンスの手すりから離れた彼女は、機能しない左足のせいで踏ん張りがきかず、そのまま尻もちをついてしまった。崩れ落ちた彼女の、その背には大量の冷や汗が流れている。

「はつ、はつ、はつ」

リズムカルに、しかし異常に行われる呼吸。

それは、あまりにも高速で機能し続ける心臓のせいだった。今の出来事のせいで、体が“生”を求めて躍起になつている。

「う……う……う……」

精神が安定しだした頃、今度は日に鋭い痛みが走った。

ずきん、ずきんと脈打つように走る痛み。

そつと包帯に触れると、そこは湿っていた。

「う、うああ……ッ」

堰を切つたように溢れ出す涙。

痛みに耐えながら嗚咽し、握った拳でコンクリート造りの床を叩く。

どこもかしこも痛みだらけ。

だが沙織からしてみれば、この痛みこそが生きている実感なのだ  
とばかりに、痛みを肯定しながらひたすら床を叩いた。

そんな、他所からみれば精神障害者のような行為も、好じとする人がいた。

「泣きたい時は泣けば良いんだよ」

その声に、思わず全てを忘れた。

いま自分がしていたことも、考えていたことも。

涙を流すことさえ忘れた。

それだけ、その声には意識を持つていかれた。

聞き間違いなど起きない、その声紋に。

「健史……？」

「おおりお姉ちゃんに任せ、お父さんもお母さんもいるんだし」「どうし」

「僕からの最期のお願いだよ。泣いても、辛くても、苦しくても生き抜いて」

「何を言つて、」

有無を言わせぬ弟の氣勢に、惑いながらも、なんとか会話を成り立たせようと沙織は試みたが……それは徒労なのだと、否応に理解した。

本当に最後となる一言が、彼女に止めを刺したからだ。

「僕はもう死んじゃったから。……だから、おおりお姉ちゃんは

「

“生きて”

大気に溶けていくその愛しい声が、空洞となつた沙織の口に満ちていく。

摩訶不思議な現象に驚く」ともなく、止まっていた涙が、またも溢ってきた。

涙は痛みを伴うことなく流れていく。

真っ暗な視界は相変わらずだが、暖かな何かが沙織の全身を覆つているようを感じる。

「こんなにも こんなにも悲しいの。」

「こんなにも、安心する。

「あ ああ……」

手を伸ばす。

その手に温もりなど感じられるはずもないが、それでも沙織は手を伸ばした。

いかないで、とこねてみた。

帰ってきて、と懇願した。

一緒に、と幻想した。

返事はひとつとして返つてこない。

……いや、それはわかりきつていたことだ。

死んでいたのにも関わらず、彼女の目の前に現われていたダレか。その異常さは彼女にも十二分に理解できている。

幽霊など信じていないが、それでもこの不思議にはそれ以上の説明が出来ない。

「健史……『めん……『めんね』

北村沙織は、頭を垂れ、飽くまで泣いた。

「なんと言つたらいいか……」

「いえ、気にしてませんから」

ついに退院の日を迎えた、今日。

送り出しをしてくれるはずの担当医さんが、それはもう、仕事で何かしら大失敗をしてかした新人のよつたな顔つきでやつてきた。

「本当、申し訳ない！」

「まあまあ。足立さん、今日は私にとつておめでたい日なんですか  
ら、そんな怖い顔してないで、もっと笑つてくださいよ」

足立さんは言つのは、私の担当医をしてくれていた人だ。  
どうやら私に嘘をついたことをいまだに引きずつているらしい。  
もう半年は経とうとしているのに。

足立さんは普段は物腰柔らかな人なんだけど、自分にやましいことがあつたり、何か悪いと思うところがあると性格が百八十度変わってしまうのである。

これは入院中知つたことなのだけれど、どうやら足立さんの奥さんは相当な力力ア天下思想な人で、足立さんのこの性格も奥さんの影響がかなり強いらしい。

尻に敷かれっぱなしなんだよ、と看護師さんから聞かされた時は、  
本気で飲んでいた水を噴き出したくらいだ。

だつて ねえ？

目が見えなくてもわかるくらいの人格者がまさか、奥さんの尻に  
敷かれてるなんて誰も思わないでしょ。

「お世話になりました」

「いえ……」ちらりと至りませんで……」

私の両親の挨拶の返しに、明らかに沈んだ声で應えてくれた足立さん。

どうやら、と一つでも責任感じているらしい。

不慮の事故なんだからどうしようもないのに。

……そう思いつつも、先生を激励する意味も込めてここは毒舌で。

「足立先生、もっと修行が必要だね」

いつもは足立さんと呼んでいるのだけれど、わざと先生をくつつけた。

足立さん本人は、足立先生とか足立医師と呼ばれるのがあまり好きじゃないらしい。

医者なのに変わった人だな、と思いつつも、その考え方には少し共感してしまった。

つまるところ、この人はどこまでも“良い人”なんだ。

先生なんて大それたものじゃない、と答えてくれたあの日のセリフを思い出す。

“ 私は生涯、勉強し続ける、ダメな医者だからね ”

「それじゃあ行きます」

「足立さん、元気でね」

「ああ。北村さんも、ね」

ロビーでのお別れは簡素で、でも、とっても意味のあるモノだった。

私はここから再出発する。

足立さんはそれを手助けしてくれた人であり、命の恩人でもある。もつと盛大にお別れ会でもやりたいことはやりたい。

でも 私と足立さんは、患者と医者だ。

その領分を忘れてはいけない。

医者は患者を助けるために尽力する。

患者は医者に助けてもらうために尽力する。

お互いは病に、そして怪我に対してもともに闘つた仲間だ。その轍は消えはしない。

だからこそ、別れの言葉など不要。

医者は笑顔で見送り、患者は笑顔で去る。

それだけで十分なのだ。

「バイバイ」

こうして、私の短くも長く感じた入院生活は、幕を閉じた。

「健史」

仄かに香る線香の匂い。

両親に車イスを押して来てもらい、ようやく墓前に立つことが出来た。

あの日 事故にあつた私と健史は、運命を別つた。

私は視力を失い、左足不隨となるも、こうして命は取り留めた。しかし健史は、その命までも失ってしまった。

私と健史にはなんの差があつたのか 今でも答えは見つけ

られないでいる。

だけど、昔から良く聞くセリフがある。

“良い人ほど早く逝ってしまう”

このセリフを引用すると、つまり私は良い人ではない、ってことになる。

まあ実際、健史は優等生で動物好きな、あらかさまに将来有望株だった。

それに對し、私はドジで間も悪く、勉強もそこそこにしか出来ない。

天秤をかけるとしたら、間違いなく運命は私を選ぶだろ？

……良い人じやない、から。

健史の幽霊事件のことは、誰にも話していない。

先生や友達はもちろんのこと、両親にだつて話をしてないし、これからもする気は全くなない。

別に話しても減るモノでもないんだけど、なんというか……この件に関しては、姉と弟だけの秘密、つてことにしておきたいのだ。幼くして逝ってしまった健史とは、姉弟として秘密の共有化なるモノをしたことがない。

普通、姉弟間にしかない、隠し事みたいなのがあると私は勝手に思っている。

全国津々浦々の姉弟なら一度は経験あるはずだ。

ま、以上の理由で話さない。

もうちょい年取つたら、そのうち話してしまつかもしれないけど。

「健史……私、約束守るよ」

あの日、絶望の只中で希望をくれた、我が弟。

そんな、死してなお私に会いに来てくれた弟を、なぜ失望させる  
ことが出来ようか。

「精一杯生きるよ。だから、もう少しあと待つてね

「は見えない。

足も不自由だ。

結婚も勝算は限りなく低いだろう。

それでも、私は生きていこう。

生きて、生きて、生き抜いて

とがあれば、その時こそ、誇って健史に逢いに行ける。

だからその時が来るまで見守っていてほしい。

「そろそろ行くわよー？」

「はーい」

下からお母さんの声が聞こえてきた。  
じつやう面会せんじまぢうじい。

「じゃあね、健史」

真つ暗な生活にも慣れてきた、十九の秋。

私は青空である「空」の下で、愛しい弟と別れを告げた。

(ア)

(後書き)

一作目の投稿になります、夢円みぞれです。

今回はありふれた題材を使おう、と書こうとして『交通事故』を取り上げて書きました。

もつと真に迫った作品を書くべきだと思ったのですが、どうしても使いたいネタがありこのような形になりました。  
腦つて面白いですよね。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6020/>

---

クロノセカイ

2010年11月18日02時42分発行